

---

# お嬢様と夜空

瑠紀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

お嬢様と夜空

### 【Nコード】

N2182D

### 【作者名】

瑠紀

### 【あらすじ】

喘息持ちのお嬢様が恋をした。夜空を見るのが好きなお嬢様。ツリーハウスの下で出会った二人。この二人の恋は、どうなるのか？お嬢様の幼なじみが出てきたり、彼の友達がお嬢様に恋をしたり…。感動の恋愛小説スタート！

## 第1話 出会い（前書き）

新連載です！よろしくお願いします。感想などいただけるとうれしいです！

第1話は、詩みたいですが、第2話からはお話し風になります。では、読み始めて下さい！

名前も、夜奈から瑠紀に変えました。ややこしいと思うけどよろしく^^^y

ちなみに、【お嬢様の憂鬱】の作者じゃないんで。紀光きみつなんです（詳しくは作者紹介ページへ）

長々とすいませんでしたっ！

## 第1話 出会い

私は、恋をした。

その日は、私の喘息ぜんそくが悪化したので家にもどった。

庭の木の上にあるツリーハウスの中で好きな夜空を見てた。

星がきれいだった。

ふと、下を見ると貴方が走っていた。

顔を見たとき、私の顔が真っ赤になった。

私は、ツリーハウスから降りた。

本当は、じいやに外に出たらダメって言われてたんだけど。

我慢が出来なかった。

どうしてもあなたに付いて行きたかったの。

私が、門の外に出ると貴方は遠くにいた。

走った。

走った。

喘息だったから走ったらだめだったのに。

息が出来ないぐらい苦しくなった。

膝をついた。

貴方が、近寄ってくるのが分かった。

嬉しくて、嬉しくて笑顔になってしまった。

苦しくなってきた…。

視界がぼやてきた。

倒れてしまった。

だれかに抱きかかえられたけどだれだったか、覚えてない。

ふんわり、女の子とちがう優しい香りがした。

私は、そのまま気を失ってしまった

気が付くと、私の屋敷の部屋にいた。

私は、じいやにとても怒られた。

でも、貴方のことしか考えてなかったから、聞いてなかった。

何か、大事なことを言っていたような気がする。

私はじいやの説教を無視して、じいやに頼んで貴方の学校を調べて

もらった。

貴方と同じ中学に行くために、受験もあきらめた。  
転校の手続きもした。

どうしても、貴方と同じ小学校に行きたかったの。

今の生活も嫌いじゃないのに…。

でもね、毎日、貴方の顔が見たかったの。

貴方の、特別な人になりたかったの。

貴方と、二人つきりになりたかったの。

貴方と、家を捨ててどこかに行きたかったの。

貴方と、いっぱい話したかったの。

いつまでも、いつまでも、貴方のそばにいたかったの。

その時は、何も分からなかった。

貴方が好きだったのに。

何で、気づかなかつたんだろう。

貴方のことが、好きで好きでたまらなかつたのに…。

そう、貴方がことが

## 第1話 出会い（後書き）

いかがだったでしょうか？

これから、『お嬢様と夜空』を読むにあたってこれは分かっ  
て下さい。

- 1．主人公は、お嬢様である。
- 2．主人公も彼も小学生である。

そして、なんと次の話では主人公の名前と彼の名前が…！

ちなみに、更新は3日に一度が目安です。

この小説が、終わると年齢を明かすつもりです  
これからもよろしくおねがいします。

## 第2話 夜の寮（前書き）

コメディなくしました…。コメディが好きならすいません…！でも、これからどんどん、複雑になっていきます！読むのは、簡単ですよ（多分…）

## 第2話 夜の寮

夜空がきれいな日。

昨日と同じぐらいきれい…。

私は、『アノヒト』がいる明界小学校の寮にいる。

明界小学校は、寮。

1階が女子で、2階が男子。

今、じいやに荷物を持ってもらっている。

明日から、明界学校（こゝ）に転校するから夜の間に来たの。

私はふと、想う。

ああ、『アノヒト』はどこにいるの？

私は、たまらなくなって寮に走って行った。

「お嬢様！」

聞こえない。

『アノヒト』のことしか考えてないから。

「ハア、ハア…」

ちよつと、走りすぎたかな？  
苦しいし、

「ゲホツ」

咳もする。

しかも、ここどこなの？  
分からない。

『アノヒト』のことしか考えてなかったから、がむしゃらに走っち  
やったの。

「だれ？」

あ、この声は

私は、後ろを見る。

「あ、昨日会った…」

『アノヒト』だ…。

喋らなきゃ…。会えたんだもの…。

「ゲホツ…あし…だから…この学校の生徒になるの…よろしくね  
…」

喋るだけでも、苦しい…。

でも、苦しい理由は他にあるのかもしれない。

だって、貴方の顔が近くある。

昨日と、同じ優しい香りがする。

優しい顔が近くにある。

黒髪がきれいに私の顔をなでる。

「大丈夫？名前は？オレは、さくらべしゅんと桜部舜斗」

桜部 舜斗…。

いい響き…。

「わ、私は…」

ああ、クラツとする。

思わず、座り込んでしまう。  
貴方のせいでも、あるよ…。

「ししおういん鹿王院 きなく紀奈紅…」

「そうか、いい名前だな」

貴方がほめてくれた…。  
うれしい…。

「ハア、ハア…」

「ちょ…大丈夫かよ？また、昨日みたいに気を失っちまうのか？」

「だ…大丈夫…」

本当は、大丈夫じゃない…。

貴方に会わなければ、こんなに苦しくなかったのに。

でもね、うれしいの

貴方に会えたことが

「これから…舜斗って呼んで…いい？」

貴方は、笑って…

「そんな、場合かよ…うん…呼んでいいぞ。 紀奈紅」

こう言った。

「ありがとう」

「でも、早く出て行ったほづがいい、男子寮女子禁止なんだよな…。今は、夜の11時だから、だれも部屋から出て行かないから、まだいいけど…」

舜斗は、私に聞く。

「立てるか？」

「うつん…立て…ない…」

本当は立てたのに、嘘をついた。

だって、貴方に抱いて欲しかったんだもの。

「分かった」

舜斗は、私をヒョイツと抱き上げる。

あ、この匂い…あの時抱いて家に連れてってくれたの、舜斗だったんだ…。

「昨日もだけど…軽いな…」

「喘息で、ご飯食べられないときがあるの…」

「そうか…」

その時、声がした。

「舜斗もつ寝ろよ…ってだれだ…？そいつ…」

だれ!?

「ゆきがしひ雪頭 れん蓮…」

わざとフルネームで呼ぶ舜斗。

え?待って…雪頭 蓮って…。

「雪ちゃん…?」

私達の夜空がまたきれいに光りだした

## 第2話 夜の寮（後書き）

次回、とうとう三角関係が…？

後、『小学校で抱き上げる！？』と思った人もいるかもしれない。実は、紀奈紅の身長が133cm（体重22キロ）で舜斗の身長が160cm（体重49キロ）なんです。異色ですよ（笑）

感想、よろしくお願いします

### 第3話 二人の部屋

「紀奈紅…蓮のこと知ってるのか？」

「うん…だ…だって、幼馴染だ…もの…」

「お…幼馴染!？」

舜斗は、びつくりしているよう。

「憶えていてくれたんだ〜 きなちゃんお久しぶり〜」

雪ちゃんは、手をひらひらしながら言う。

「蓮と幼馴染ってことは…。紀奈紅…もしかして…金持ち!？」

そうだけど…。

「わ…私…の家は…ゲホッ…」

ああ、だめ…喋れない。

「だめでしょ？舜斗。きなちゃん、喘息なんだからさ」

雪ちゃんは、私の口を手でふせいで、言う。

「あのね、きなちゃんの家は、鹿王院家なんだよ？」

「え？あそこお!？」

舜斗が、信じられないというように叫ぶ。

「お…大声だしたらダメ…ハアハア…」

舜斗は、苦笑して、

「お前もな」

と言った。

胸がカアと熱くなる。

何で…？

「鹿王院家って、世界の企業の半分以上を持っているっていうあれ？」

舜斗が、私に聞く。

そんなに、見つめないで…。

私は、うなづく。

「すげー！超お嬢様じゃん！」

「だから、言ったでしょ？」

雪ちゃんと舜斗がわいわい喋ってる。

ズキッ！

やだ…もつと苦しくなってきた。

「ハア、ハア…ゲホツ…く…苦しいよ…舜斗…」

胸をしめつけるみたいに、苦しい…。

「大丈夫か？ヤバイ…どうする、蓮!？」

舜斗に抱きついている力が強くなる。

喘息の最悪の、パターンだ…。

「僕達の、部屋に入れよう」

「え？待て。オレ達より、専門の人にまかせた方が…」

「バカか？お前、寮の扉は、11時30分に閉まるだろう？階の扉も」

「あ、そうだったな…じゃあ、オレ達の部屋か…」

舜斗は、悩んでるよう…。

そら、そうだよな。

男子寮は、女子禁止こにょだもの。

「ゲホツ…ゲホツ…ハア、ハア…ゲホツ」

い、息が出来ない…！

「紀奈紅…!」

舜斗は、私をギュツと抱いて、一番端っこの部屋に走って言った。  
2…299室。

「オレと、蓮だけの部屋だからだれも、こないぞ」

ガチャ

その部屋は、10畳ぐらいの部屋。

男の子の部屋って汚いと思ってた。  
以外とキレイ…。

「ここ、実は5人部屋なんだよな」

「舜斗、僕がきなちゃん持つ布団しいて」

舜斗が、雪ちゃんに私を渡そうとする。

やだ…！舜斗に抱いといて欲しい…！

「きなちゃん…」

雪ちゃんは、私の気持ちがあつたのか、複雑な顔をして、布団を出し始めた。

布団を敷きおわると、舜斗は、私を寝かした。  
もうちょっと、抱いといて欲しかったな…。

「蓮、手際いいな…」

「幼稚園のころ、よくきなちゃんの喘息の世話してたから」

「ふん。」

舜斗は、私の横にストンっと座った。

「紀奈紅…大丈夫？」

「うん…ハア…ゲホッ…」

舜斗は、私のおでこをコツンっと人差し指で触った。

「嘘つくなってー！」

舜斗は、ニコツと笑った。

ドキッ

うれしくなる…。

苦しくなる。

「あ、ちょっと、トイレ」

舜斗は、立った。

「蓮、紀奈紅のことよろしくな」

雪ちゃんは、うなずく。

ガチャ

舜斗が、出て行った。

何で、こんなに寂しい気持ちになるんだろう。

「さ・て・と…」

雪ちゃんが、私をジッと見る。

そ…そんなに見つめられたら…恥ずかしいよお…。

「二人つきりだね きなちゃん」

え？

「ちよつと、お話し聞いてくれる？」

雪ちゃん…？

### 第3話 二人の部屋（後書き）

3日に一回が目安なのに更新しまくってますね…m | | m  
すいません…。

第4話 雪ちゃん(前書き)

雪ちゃん、個人的に好き…。

## 第4話 雪ちゃん

「え…雪…ちゃん…何の話…?」

雪ちゃんは、寝ている私を見て言う。

「本当に鈍感だね、きなちゃんは…」

そういうと、雪ちゃんは、

私のほっぺにキスをした。

「え?…ちよつと…雪…ちゃ…ゲホツ…」

やめて…!私、舜斗にファーストキスをしてほしい…!  
やだ…!

舜斗が、いいの

雪ちゃんは、いたずらをして見つかった子供のようにニヤリと笑った。

「して欲しくないの?」

「…」

雪ちゃんは、私のおでこをそつとなでた。

ああ、こうして見ると雪ちゃんは、可愛いな。

私と同じ茶色の髪に、黒の瞳。

男の子としては、可愛いと思う。

これなら、幼稚園のときもてていたのが分かる。

でも、やっぱり舜斗のことが

「やっぱり、舜斗にしてほしいんだね」

何で、そのことを知ってるの…？

私は、小さくうなづく。

「可愛いよね、きなちゃんは。好きな人に会って、赤くなるのも可愛いよ」

「え？」

雪ちゃんは、びっくりした顔で言った。

「気づいてないの？」

「な…なんの…こと？」

何のこと？

私、好きな人なんか…いない！

「好きなんでしょう？舜斗のこと」

舜斗のこと…？

あ、そうか。  
好きだったんだ。

舜斗に会うと、ドキドキするのも、全部そのせいなんだ…。

苦しくなるのも

顔が赤くなるのも

全部、舜斗が好きだったんからなんだ

涙が出てくる。

「え？ちょっと、どうしたの。きなちゃん!？」

雪ちゃんが、私の涙をふいてくれる。

「あ…ありがとう…私、舜斗のこと好きだったんだ…！」

涙が、あとから、あとから、出てくる。

「きなちゃん…」

雪ちゃんが、また複雑な顔をする。

ありがとう、ありがとう。

私の、気持ちを気づかしてくれて。

「ありがとうー」

雪ちゃんは、私の髪をなでる。

「何、言ってるの？僕、きなちゃんのこと好きなんだよ。」

え？

「何で…？」

「幼稚園のころ、約束したじゃん。」

幼稚園のころ…？

私は、記憶の中を探ってみる。  
あ。

~~~~~  
~~~~~

『きなちゃん、ぼくのこと好きっ。』

『うん、大好き』

『じゃあ、これからずっと一緒にいようね』

『うん！』

~~~~~

「でも、あんなの、昔のことだし…」

雪ちゃんは、またニヤリと笑う。

「約束は、や・く・そ・く」

雪ちゃん…。

「困った顔もかーわいい」

雪ちゃんが、私の顔に手を近づける。

やだ…！

私は、雪ちゃんの手をはらう。

「分かってる。無理やり、きなちゃんを、連れ出したりしない」

ガチャッ

舜斗…！

雪ちゃんは、立つ。

雪ちゃんの髪の毛がサラツとなびく。

「ただいま…って何してんだ？蓮」

雪ちゃんは、舜斗に耳打ちする。

でも、しっかり聞こえた。

「勝負だ…！舜斗！」

何のこと…？

## 第5話 質問会（前書き）

もうすぐ、受験だ（汗）

受験の時は、更新出来ないと思うのでよろしくお願いします。

## 第5話 質問会

「鹿王院 紀奈紅です」

「うわっ！超可愛い！」

「お人形さんみたい！」

「え〜お菓子でしょ」

みんなが、私の外見についてわいわい言っている。今は、自己紹介が終わったとき。

でも、本当に私のこと可愛いと思って欲しいのは

私は、チラッと舜斗を見る。

「鹿王院さん？」

舜斗は、ピースサインをする。  
舜斗…。

「鹿王院さん！聞いてます？」

「は、はい。何でしょうか？」

私は、動揺しながら答える。

「今から、質問会するけどいい？」

「はい。いいですよ」

「んじゃあ、質問したい人！」

雪ちゃんと舜斗以外がガバツと手を上げる。

「うひょー人気だねえ、きなちゃん」

「ははは、そうだなあ」

舜斗が笑う。

そうです。貴方のその笑顔にまいったんです。

「何で、そんなに紀奈紅ちゃんは細いの？」

女の子が私に質問する。

「喘息でね…細いの」

教室全体が「シーン」とする。

何か、ダメなことを聞いた雰囲気だった。

「そ…そんなに深刻じゃないから！」

私は言った。

本当は、とつても深刻だったのに。

ちよっと、走っただけでも苦しくなるのに。

もっと、苦しくなったのは舜斗に会った日

「え…えっと次のしつもん！」

みんなが、一斉に手を上げる。

「紀奈紅ちゃんってどんな食べ物が好きなの？」

「ケーキかな…。甘くて…」

舜斗みたいだから

「え？甘くて、好きなの？」

私は、また動揺して言う。

「あ…そうそう…あはははは…」

「かつわいい きなちゃん」

雪ちゃんが冷やかしてくる。

もう…。

「紀奈紅ちゃんは、前は何処の小学校行ってたの？」

「プレゼント学園」

「え〜〜〜〜！！！？？？」

みんながびっくりする。  
何で？

「あそこ、超お嬢様学校だからだろ」

舜斗が、後ろの雪ちゃんとはなしてる。

「え…もしかして…鹿王院さん…もしかして…鹿王院財閥の…一人娘…？」

秀才っぽい男の子が言う。  
眼鏡がずり落ちてる…。

「うん」

「マジイイイイイ！！！！？」

秀才君、キャラこわしてる…。

「とんでも、ないやつが転校してきたぞおおおお！！！！！！」

秀才君、教室を走り回って叫んでいます。

すごいよ…。  
ある意味…。

「かきざかき牡蠣坐架鬼…ヤバツ…！」

舜斗が、走ってきた牡蠣坐架鬼君（すごい名前！）を避ける様に机を横に動かす。

ああ…素敵…。

「舜斗く〜ん素敵い〜」

ハートがつきそうな感じで言う女の子。

だれ??

「五月蠅い。我喜沢」

舜斗が、迷惑そうな顔をする。

よかつた〜彼女じゃないんだ…。

舜斗に彼女なんかいたら…私どうしたらいいんだろう…。

だって、その子とっても可愛いだもの…。

髪の毛を二つにくくって、（私は、背中ぐらいまである髪をリボンでカチューシャみたいにしてる）スタイルがとってもいいの…。

しかも、活発そうだし…。舜斗に、似合いそうなの…。（ちなみに下の名前は「弥生」らしい。）

それから、質問会は1・2時間目を使って行われた。

た でも、その時は篠河しのかわ 竜牙りゅうがが私を見つめていたのは、気づかなかっ

## 第5話 質問会（後書き）

なんと、紀奈紅のモデルは「しゅ」「ャラー!」のりなんです  
弥生は…分かります?（ヒントは『なよし』!）

第6話 竜牙（前書き）

更新が、遅れてすみません…。

## 第6話 竜牙

「こいつ、オレと蓮の親友の竜牙」

竜牙君という子は、さわやか系の美形。

「こんにちは。竜牙くん」

竜牙君のほっぺがポウと赤くなる。

どうしたの？

「こんにちはわ、紀奈紅…って呼んでいい？」

私は、笑顔で答える。

「いいよ。私も、竜牙っていうね！」

また、竜牙の顔が赤くなる。

なんか…可愛い。

「竜牙は、素直だね！」

雪ちゃんが、笑う。

いたずらっぽい笑顔。

??何で？

「ご飯買いにいってきなよ。二人でね、仲良くなるのに、最高じゃーん！」

と、いうと雪ちゃんは、メモを渡す。

「いっ、竜牙」

私が、竜牙の手をとると、竜牙の耳まで赤くなる。

「いっっ…っか…」

私達は、売店まで歩く。

歩くと、学校の子が10中人10人が振り返る。

そらそっだよね、竜牙はとってもかっこいいもん。

舜斗まではいかないけど

でも、何で男の子まで振り向くんだろっ。

「おばちゃん、ヤキソバパン4つね。あと、いちご牛乳2つとコーヒー牛乳ね」

竜牙が、売店の女の人にメモとお金を渡す。

「おお！竜牙君、今日はすごいべっぴんさん連れてるねえ！」

おばちゃんが、私を見ながら言う。

恥ずかしい…。

「こんにちわ。ここに転校してきた、鹿王院紀奈紅です」

おばちゃんは、私の頭をなでる。

「ほいつ！おまけつけといたよ！」

竜牙に、袋を押し付けると、次のお客さんのほうをむいた。

竜牙、重そう…。

だって、下を向いてるから…。

私は、下を向いている竜牙の顔を見ながら言った。

「大丈夫？私、持つよ」

でも、竜牙は、また耳まで真っ赤になって、

「だ…大丈夫！本当に…！」

と言って走っていった。

あたしは、追いつけないから、歩く。

ふう…。

「雪ちゃん！舜斗！」

私は、自分の教室まで行くと、自分の席に座った。

私の席は、舜斗と雪ちゃんの横で、竜牙の後ろ。

だから、舜斗をじっくり見ることが出来る…。

「いただきまー…って…私のパンがない…」

「あ、ごめん！今から買ってくるから！」



「やっぱりね」

「何で、知ってたんだよ、蓮！」

舜斗が、蓮を揺さぶる。

「ちょ…ちょっとやめてよ」

「あ、ごめん」

舜斗が、手をぱっと離す。

「ふう、あのね、竜牙の顔を見てたら分かるよ」

舜斗が、竜牙をジッと見る。

「わかんない」

蓮は、大きさにため息をつく。

「だっかつら、舜斗は気づかないんだよ…」

間をためて言う、蓮。

「きなちゃんが、舜斗のことがスキってこと…」

それは、小さな、小さな声だった。

「え？何て??」

「おーしえないっ!」

蓮は、フフツと笑う。

舜斗は、最後の言葉は聞こえなかった。  
でも…

「紀奈紅が…舜斗のことスキだったなんて…」

竜牙は、聞いていた。

~~~~~

「あ、何? 竜牙…」

私は、不思議そうに言う。

「いや…何も…」

竜牙は、複雑な顔で立った。

「あれ? 焼きそばパンは?」

「や、食欲ない」

え? 何で???

「ゴメン…紀奈紅」

竜牙は、教室を出て行った。  
竜牙…。

「あ！きなちゃん！」

苦しそつで、竜牙が可哀想だった。

だから、走ってしまったの。

屋上に



## 第6話 竜牙（後書き）

次は、『お嬢様の憂鬱』とコラボしますので、更新が遅くなるかと  
…（汗）

## 第7話 ファーストキス（前書き）

更新が遅れてすみません…m( )m3日に一度の更新守ってませんよね…。勝手ながら、更新は不定期にさしていただくことになりました…。すみません…。

今回は、サブタイトルにも書いてあるように紀奈紅のファーストキスです！「小学生の癖に生意気な！」っと、思つかもしれませんが、紀奈紅達4月に中学生になるので…。そのところよろしくお願いします。

## 第7話 ファーストキス

「竜牙…？」

私は、少し苦しくなったけど竜牙を探した。

「何ですか？紀奈紅」

敬語を使った声。

竜牙の声…。

「竜牙…」

竜牙は、フェンスにもたれかけていた。

「ねえ…敬語なんだね…竜牙」

竜牙は、意外そうな顔をして、

「もともと、敬語ですが」

と、言った。

「え？でも、あのときは…」

竜牙は、綺麗な顔を私に向ける。

赤くなってる顔。

こっちのほうがかっこいいよ。

「あのとき…ですか？あのときは…少し興奮していました…。すいません」

竜牙が苦笑いする。

「謝る必要は、ないよ」

すると、竜牙は私の手をとって隣のフェンスに座らせた。赤くならないなんて…敬語のところもそうだけど、さっきの竜牙とはちがうような気がする。

私は、なんとなくポケットを探ってみる。  
あ。

「見て、竜牙！これ」

私が出したキーホルダーをみて竜牙が言った。

「月のキーホルダーか…紀奈紅に似合ってますよ」

「ありがとう！」

私は、笑顔で答える。

「私ね、夜空が好きなの。昔から、喘息で家に帰ることが多かったから、夜空をベッドから見るのが多かったから」

「へ」

「今日も、晴れだからみれるかな…」。

楽しみっ！

「オレの…母親は…」

竜牙がいきなり話し始める。

「1週間前に…死んだんだよな…」

独り言のよう…。

「え！？竜牙のお母さんが…？」

「そう、それなのに…ふつうに学校きてるなんておかしいですよね」  
たしかに…私だったらお母様がなくなったら…家から出ないと思  
う。

気がおかしくなってたかもしれない。

「オレは、なぜか…涙がでてこなかったんです」

え？

「たしかに、悲しかった。でも…涙が出てこなかった」

涙が…

出てこなかった！？

「なぜでしょう？オレは母さんを愛してなかったのか。いえ、とっ  
ても愛していました。なら、泣くのがいやだったのか、それもちが

います。むしろ、泣きたかったのですから。なあ…紀奈紅はどう思いますか？」

竜牙が私のほうを向く。

え！？私！？

「わ…私は、それでいいと思う…。色んな人がいるし…。いつかは涙もでてくるよ！」

竜牙は、それを聞くと安心したように息を吐いた。

「何で、竜牙は私に相談したの？舜斗や雪ちゃんのほうが親しいじゃない」

竜牙は、それを聞くと、ニコツと笑った。  
そして、

ギシギシッ

私の顔を竜牙の顔に近づけて、

私の唇と竜牙の柔らかい唇を重ねり合わせた。

「……………」

竜牙がもたれかかってくる。

ギシギシッ

また、フェンスが動く。

キ…ス！？

…。

わっ！

私は、竜牙をつきはなした。

「なにするの！？」

私ともあるうものが、怒鳴った。

でも、竜牙はひるむ様子がない。

竜牙は、顔をまたぐと近づけた。

「オレが、紀奈紅に相談した理由は、こういうことです。オレは、紀奈紅にこういう気持ちをもってるんです」

竜牙は、そう言って、屋上から出て行った。

「あゝあ、楽しくなりそっ」

雪ちゃんの声が聞こえたような気がした。

でも、そんなの今の私には聞こえない。

何で、キスしたの？

私にどういっ気持ちを持つてるの？

なぜ？竜牙



## 第7話 ファーストキス（後書き）

いかがでしたか？

辛口でもいいんで、評価&感想下さい！出してほしい、キャラクターでもいいです！

それから、人気キャラクター投票をおこないます。いつでも、いいのでよろしくお願いします。この「お嬢様と夜空」の最終回にのせるつもりです。

## 第8話 ルームメイト（前書き）

一日に2回更新するのは初めてです。  
新キャラでてきます

## 第8話 ルームメイト

「ここが、鹿王院さんの寮の部屋だよ」

女の先生が私のルームメイトにはなしかける。

「わぁ！ヨロシクね、紀奈紅ちゃんっ」

「…よろしく…鹿王院さん…」

「よろしくですう〜、紀奈紅さんっ」

全部で3人のルームメイト。

みんなが、寄って来る。

でも、今は…そんな気分じゃない…。

竜牙の本当の気持ちを聞きたい…。

あれから無視された。

竜牙…。

「あたしの名前は、斉藤 紗紀だよっ」

私は、その声で我に返る。

後ろを見たら、先生がいなかった。  
帰ったみたい。



暗いな…。

でも、私は笑顔で答える。  
悪い子じゃなさそうだし。

「よろしくね、亜宮敵」

亜宮敵は、ニコツと笑うと部屋の端っこに座った。  
笑ったら、可愛いな。

「あたしは、赤坂 杏実きょうじみですう〜」

その子は、天然パーマの髪の毛を揺らしていった。

「杏実ってよんで！」

「分かった、杏実！」

一通り、みんなの自己紹介が終わると、紗紀と亜宮敵と杏実が座ってと言った。

「紀奈紅ちゃん、喘息なんだってねっ」

私は、うなずく。

「昔から、喘息で苦労してきたの…って…なんか苦労話みたい。フツ」

私が、笑うとみんなも笑う。

「みんなは、何組？」

「2くみっ」

「…1組…」

亜宮敵と同じクラスだったんだ。

「2組ですう〜」

「へ〜、私は1組。ヨロシクね。挨拶遅いけど」

紗紀が、言った。

「紀奈紅って超可愛いねっ」

私の顔がみるみる赤くなるのが分かる。

「そう…?」

「うんっそうだよっ」

紗紀は、ニヤリと笑って言う。

「羨ましいっ」

「…たしかに…」

「羨ましいですう〜」

私は、笑う。

「嬉しい」

杏実が、またニヤリと笑う。

「紀奈紅、モテモテでしょ？今日なんて、あの3人と歩いてたじゃないですかあ〜！」

え？

「あの3人？」

「え〜、知らないの？まあ、転校してきたからしらないと思うけど、桜部 舜斗、雪頭 蓮、南古屋 みなみこや 竜牙ってこのモツテモツテの3人なんだよっ」

へ〜。

やっぱり、あの3人モテるんだ。

私みたいな、女子と一緒に歩いていのかな？

「でも、紀奈紅ちゃん超美少女だし、だれとくっついてもおかしくないけどっ」

紗紀が言った。

「ありがとうっ」

私達は、話し合った。そして、最後の話が…私にとってこの3人が親友になるきっかけだった

## 第8話 ルームメイト（後書き）

次は、8話目のつづきです。

収まりきれなかったので、2話またぎます。サブタイトルはちがいますが…。

## 第9話 この秘密（前書き）

今回も、LOVEはありません。次回はありますので…。LOVE  
好きな人すいません。っていうか、紀奈紅天然すぎですよね…。

## 第9話 こここの秘密

「もう、遅くなっちゃったねっ」

紗紀が、腕時計を見ながら言う。  
ピンクの腕時計なんだ…。

「じゃあ、寝る??」

私が、言うと紗紀と杏実がうなずく。

「…待って…」

亜宮敵が、口を開いた。

今まで、何も言わなかったから私達はビックリした。

「何？亜宮敵」

亜宮敵は、チラリと紗紀と杏実を見る。  
気まずそうな、紗紀と杏実。

「あの事言つんですかあ〜？亜宮敵ちゃん」

杏実が口を開く。

さっきよりテンションが低め。

「でも、やめといたほうがいいと思いますう〜。まだ、紀奈紅ちゃんには」

え？私はダメなの？

「…紗紀はどう思う？…」

亜宮畝が言う。

紗紀は、少し考えてから

「自由」

と、言った。

何の事なんだろう。

「…鹿王院さん…貴女は…私達に…全てを話しましたか？…」

え？

どういうこと？

「…」

「…鹿王院さん…」

私の全て？

お兄さまのことも…？

「うん…みんなに絶対に話せないこと以外は言った」

亜宮畝は、コクリをうなずいた。

「…そのことは…私達が…信用できないからですか…？」

…。

どうなんだろう、この3人のことを信じられているのだろうか…。

「うん。みんなを信じてるよっ」

この3人は私が、鹿王院家の一人娘と言っても、特別扱いしなかった。

「…じゃあ…私達も…信用します…」

紗紀と杏実が肯いた。<sup>うなず</sup>

「…私達は…拒食症…なの…」

拒食症…？

「拒食症って何？」

杏実が、説明を始めた。

「拒食症っていうのは、食事をするのを拒んでいる人たちのことですよっ」

そっいえば…紗紀達はとっても細い…。

「過食することもあるし、吐くこともある」

あ…吐いちゃうのか…あたしも喘息でそっいうのあったな。

「苦しいよね…」

みんなが肯く。

「この部屋は…そういう子達が集まる部屋。普通の人と一緒にだつたら、迷惑がかかるかららしいけど…」

そこで、紗紀は、言葉を切る。

私、勘違いされてたのかな…。私も細かいし。

「おかしいよねっ。あたし達、何も悪いことしてないのにな」

紗紀がうつむく。

「ありがとう、そんなこと言ってくれて」

私は、お礼を言う。

「次は、私が今日考えていることを言っね」

私は、竜牙のことを言った。

竜牙が赤くなったこと

屋上に行ったこと

キスされたこと

3人は、しずかに聞いてくれた。

「それって……」

紗紀は、そこできつた。

ニヤリと笑う。

「何にもないっ!」

亜宮畝と、杏実も立って布団をひき始めた。

何ナノよ。

「それは、たぶん紀奈紅ちゃんのことか……」

「え?何て?」

でも、紗紀はフツツと笑っただけだった。

もう!

まあ、いつか…私元々相談しやすい人みたいだから。

たぶん、それだよっ。

「ねよっか」

私達は、布団にもぐりこんだ。

でも、布団に入って寝るわけない。

私達はそれから、話しまくった。

一生の親友になりそうな気がする

でも、やっぱりお兄さまのことは言えない

舜斗がスキつてことも言えない

ゴメンね 紗紀 亜宮 畝 杏実

## 第9話 こここの秘密（後書き）

明日も、更新するつもりです。

大晦日は、スペシャルでお送りしたいと思ってマス

## 第10話 お迎え(前書き)

今回は、雪ちゃんのLOVEです！雪ちゃんファン)いるのか？  
には、たえられないかも…。っていつか、こんなお迎えほしい！  
(作者の妄想)

## 第10話 お迎え

「…く…チャン…ちゃん…」

私の名前を呼ぶ声が聞こえる。

私は、目をこすりながら起きる。

「…亜宮敵…今何時？」

亜宮敵は、だまって沙紀のピンクの腕時計を出す。

AM 6:00

…。

ここでは、起きる時間なのかな？

いつもは、8時に起きてるんだけど。

ま、いつか！

「起きるよ。布団一緒に直してくれる人！」

「は〜い、あたしが手伝いますう〜」

「ありがとうございます、杏実」

杏実は、ニコツと笑うと、私が持っている布団を持ってくれた。

「ここは、朝7時に登校するのが、常識なんだよっ」

沙紀が、ニヤツと笑う。

「早い…」

びっくり！

「紀奈紅のところはいつだった？」

「いつでも、よかった」

「え〜〜〜!!??」

そんなに驚くところ？

「ありえないですう〜」

杏実も驚く。

「…とにかく…早く…いかない…?…」

亜宮畝が、口を開く。

そうだね。

私たちは、もともと用意してあった荷物を持つ。

「行こっ」

沙紀が、つきつきしながら言う。

私が、戸を開けると…。

「は〜い、きなちゃんっ」

「おはようございます。紀奈紅」

「おはよう、紀奈紅！」

…。

「雪ちゃん！？竜牙！？舜斗！？」

そう、そこには舜斗たちがいた…。

「何で、ここにいるの？？」

「僕らの、お姫様だから」

「え？どういこと？？」

後ろで、沙紀たちが驚き半分、嬉しさ半分みたいな顔をしてる。

「いや〜、連が行きたいっていうんでさあ」

「同じく」

「でも、女子寮こしりょうって男子禁止なんじゃ…」

「お姫様を迎えにくのに理由がある？きなちゃん」

「うっわあ！！！！！！！！衝撃発言ですう〜」

杏実！

「でも、とりあえず…出て行かないと…」

私は、おそろおそろ言う。

本当は 嫌じゃない

舜斗も来てくれた

竜牙も来てくれた

なにより お姫様って言われたのが嬉しい

ありがとう 雪ちゃん

「じゃあ、出て行きますか？お姫様」

雪ちゃんは、私の手をとる。

「うん！」

なんだか、みんなといるのが楽しい…。

あ。

「沙紀たちもいい…？」

「…いいけど…」

雪ちゃんが、私の肩に手をまわす。

「きなちゃんは、僕のものねっ」

！！

私の顔が赤くなる。

雪ちゃんの…バカ…。

「ヒヒヒヒ」 どうぞ「ゆっくり」

沙紀が、舜斗の手をとる。

え？ちよつと…舜斗は…。

「しゅっくりですう」

杏実が竜牙の手をとる。  
嫌そう…。

「行こうよ！きなちゃん」

私は、雪ちゃんの手をはらう。

「いやっ…！！私は舜斗がいいのっ…！！…！！」

雪ちゃんは、複雑そうな顔をする。

「…今日だけ…」

雪ちゃんは、私をお姫様だっこする。

「え？ゆきちゃ……」

「僕は、本気できなちゃんのことスキなんだよ？」

そんなこと……。

「でも、私は舜斗がスキ……」

雪ちゃんは、私をおろした。

「わかった、でもきなちゃんは僕のお姫様。一緒に行きましょう」

行くだけなら……。

「いいよ……今回だけ」

雪ちゃんと私は歩きだした。

雪ちゃんと笑いながら

## 第10話 お迎え（後書き）

次回は、番外編です！一度、本編から外れます。そこをご了承ください。  
LOVEは、あるんで。

第11話 番外編 大晦日（前書き）

今回、長いので、気合い入れて見て下さい（笑）番外編なんで、見なくても本編には影響しません。（たぶん）時間があるときに読んでいただけると嬉しいです。

今回、雪ちゃんと紀奈紅が…！

マセすぎです。この二人。

紀奈紅も、天然すぎ！

番外編を読まない人も、読む人も…

A H A P P Y N E W Y E A R ! ! ! ! !

よいお年を！（少し早いですが）

そして、今年も「お嬢様と夜空」をよろしく願います。

第11話 番外編 大晦日

「お嬢様、紅茶をここに置いときますので」

「分かりました」

今日は、冬休みだから、家に帰ってる。

「憂鬱ですね…お嬢様」

そろそろ…舜斗に会えないから…。

「そうです…。憂鬱なんです…。紅茶、フランスの皇室からいただいたものにしていただきます?」

「はい」

じいやが、紅茶を片付ける音が聞こえる。

私は、それを窓の外をみながら聞く。

こうやっていたら…舜斗に会えるとおもったから…。

そんなわけないよね…。

「お嬢様、用意できました」

「ありがとう」

私は、窓から目をはなす。

紅茶を一口飲む。

「おいしい…！」

「そうですか」

やっぱり、メアリの選んだ紅茶だわ…。  
すっごく、おいしい…。

ここで、舜斗がいてくれれば…。

なんてね。

「お〜い！紀奈紅！！」

ほら、舜斗の声が聞こえてくる。

私、どれだけ舜斗のことスキなんだろ…。

「お嬢様、クラスメートの桜部舜斗が呼んでいます…」

え！？

気のせいじゃない！？

私は、外を見る。

そこには、舜斗がいた。

「舜斗！！何できたの??」

舜斗は、首を傾げる。  
聞こえないんだ…。

「じいや」

「はい」

「舜斗を家に入れてあげて」

「え…でもそれは奥様から…」

「いいから！」

「は…はい！」

じいやは、そそくさと舜斗を呼びに行く。

5分後

「桜部様でございます」

じいやは、そういつとどこかに行った。  
まるで、自分が邪魔者のように

「舜斗！」

「紀奈紅！」

おもわず、舜斗に抱きつく。

「…紀奈紅…？」

「あーゴ…ゴメン…」

舜斗は、私の頭をなでる。

「いいよ。紀奈紅可愛い妹みたいだから！」

私の顔が、赤くなる。

どんな理由でも舜斗に可愛いと言ってくれたのが嬉しい

「とにかく、座る？」

私は、舜斗をソファに誘う。

「うん」

私たちは、隣同士で座る。

そつと、舜斗によりかかる。

心臓の鼓動が早くなる。

「ねえ…」

「何？」

「何で、ここに来たの？」

「紀奈紅に会いたかったから」

私の心臓の鼓動が早くなる。

そ、そんな理由で…。

「一緒に、大晦日すごさない？」

「うん…」

嬉しいよ…舜斗…。

「じゃあ、蓮とか竜牙呼ぼうぜ」

え…。それじゃあ、舜斗と二人の時間がなくなる…。

まあ、ずっと一緒にいたら心臓がもたないかも…。

「紗紀と、杏実と亜宮畝も」

「モチロン」

舜斗は、携帯を出す。

私は、家の電話で紗紀たちに電話をかける。

「舜斗…」

「何？」

「何か、眠くなってきた…」

舜斗は、私の頭を自分の膝に置く。

膝枕!!!???

「…重くない…?」

「全然。いつも、弟達がのっけてくるし  
そうなんだ…。」

「…このまま、お話ししていい…??」

「?べつにいいけど…。」

やった!

「舜斗何人兄弟?」

「3人」

!

3人…私一人っ子だから。

「楽しい?」

「???楽しいけど…騒がしいときもある」

「ふふつ。そうなんだ」

「オレは、紀奈紅みたいな妹が欲しい」

「…嬉しい…」

「え？何か言ったか？」

「何も」

あ、だんだん眠くなってきた…。

「ごめん…眠くなってきた…」

「なら、寝なよ」

「うん…おやすみ、舜斗」

舜斗は、ニカツと笑って

「おやすみ、お姫様」

と言った。

お姫様って言うてくれて…うれ…

「スースー」

「可愛い、お姫様」

50分後

「…や…」

え？なんの声？

私は、起き上がる。

まだ、舜斗の膝で寝てたんだ！

「やつらしい〜、きなちゃん」

いつのまにか、雪ちゃん、竜牙、紗紀、杏実、亜宮敵がいる。

「やらしくないもんっ雪ちゃんのバカ！！」

雪ちゃんは、にや〜と笑う。

紀奈紅ちゃんはっ

「ホントにやつらしい〜」

紀奈紅ちゃんはあ〜

フフッ  
「

「…やらしい…」

あ、亜宮敵までっ！

「やらしくないの…」

雪ちゃんは、笑って私の横に座る。

「僕の膝にも乗って」

なっ…。

「嫌っ！」

「そんなあ〜！」

「…とにかく…あそこのツリーハウスで年をあげない…？」

亜宮畝が、口を開く。

「うん。そうだな」

時間は、もうPM11:00

ツリーハウスの下

「じゃあ、今年にさらばだねっ」

紗紀が大きな声で言う。

「でも、まだ、11時59分…」

「そんなの気にしない！」

「カウントしよ」

私が言う。

「いいよですう〜」



私たちの唇が、重なる

とろけそうなぐらい柔らかい雪ちゃんの唇

わぁ…雪ちゃんの顔とっても綺麗…

スキになっちゃうよ…

いつのまにか手をつないでる

雪ちゃんが、私を抱き上げる

キスはまだ続く

不思議といやじゃない

竜牙のときよりいやってかんじがしない

何でだろう

バーンバーン

後ろで、花火が上がる。

暗くてみんなには見えないみたい

雪ちゃん…

今回は、拒めなかった…

気持ちいいから…

私たちは 花火をバツクにキスをした



第11話 番外編 大晦日（後書き）

「舜斗がすきか、雪ちゃんがスキかはつきりせーやあ！……！！！」  
と、思ったそのあなた。

舜斗が、スキなんですよ。この浮気娘（笑）

っていうか、紀奈紅の表現が、15禁になりそう！！  
ヤバイ…。

来年は、コメディも書きたいと思っています。  
よろしく願います。

b y ・ 紀 光

## 第12話 慌しい朝

「紀奈紅様。おはようございます」

へ？

私のまわりを数十人の男の子がかこんでいる。

「お…おはよう…」

何でこんなにいるの？？

「きなちゃんのファンかなあ？」

私のファン？

私そんなに可愛くないとおもっただけど…。

「紀奈紅様、お荷物お持ちいたします」

「あ…ありがとうございます」

なんか、変な気分…。

「ねえ…」

私は、荷物を持ってくれた眼鏡をかけている男の子に話しかける。

「なんでございましょうか？」

「何で、こんなに私の周りに人が集まってるの？」



そういうと、男の子達は走っていった。

変なの。

「きなちゃんは鈍感だねえ」

「鈍感？」

雪ちゃんは、笑う。

「舜斗と一緒に」

舜斗と？

一緒…

どんな理由でも一緒っていうのはうれしいな

何で雪ちゃんは私の恋の応援をすることのほうが多いんだろう

わかんないや…

「ゼエゼエ…蓮…紀奈紅…」

舜斗…！

「どっしたの？」

舜斗、何でここにいるの？

紗紀といっしょじゃ…。

「逃げてきた…。何かしつこかったから」

え？しつこい…？

もしかして紗紀、舜斗のこと…。

「質問攻めだぜ。兄弟のこととか、動物の話とか」

あ、そっちのしつこいね。

びっくりした…。

紗紀が舜斗のことスキなんてありえないもの

「紀奈紅…ハア…」

「な…何!？」

舜斗はまだ苦しいみたい…。

「荷物…持って…ちよっとの間」

「いいよ」

私は舜斗から荷物を受け取る。

ずっしり重い荷物

「紀奈紅！蓮！舜斗！ここにいましたか」



「僕が持つてる」

私が持ちたかったんだけど…。  
いつでも、持てるしいいか。

「よろしくね。雪ちゃん」

「はいよ」

雪ちゃんは、スキップで教室の中に入っていった。

「ふふ。雪ちゃんは、元気だね」

「そうですね」

はっ!!

今竜牙と二人つきり…？

なら、あのこと聞けばいいんじゃない…。

「ねえ……竜牙……」

### 第13話 竜牙へのキモチ

「何で私にキスしたの？」

竜牙の動きが止まる。

お願い教えて。

「…今さらそれを聞かれるとはおもいませんでしたね…」

竜牙は苦笑する。

「ごめんね…一晩考えたんだけど…」

紗紀達にも相談したんだけど…。

なんか…教えてくれなかったの…。

「別に…紀奈紅のせいではありません」

竜牙は笑う。

「紀奈紅は…恋をしたことがありますか…？または…恋を今…していますか？」

竜牙がいきなり話す。

恋…

舜斗がスキでスキでたまらないこのキモチ…

これが…恋…

「してるよっ。恋…をしてるよっ」

無意識のうちに大きな声を出してしまった。  
歩いている人がこっちを向くけど知らない。  
なぜか気にならなかった。

「そうですか…。そうですよねっ」

竜牙は何かを思い出したような顔をする。

なぜか悲しそうな顔

「でも…」

竜牙。

私のことで悲しそうな顔をしないで！

「竜牙のことも好き」

「え…？」

会ったときも

この言葉を言う前も

「好き」なんか思ってなかった

でも

竜牙は友達として好きってこと

気づいてしまったの

これ以上も

これ以下も

いかない

友達としてのこと

「オレのこと…ですか？」

「うん。友達として」

竜牙がガツクリした顔をする。

「そうですか…」

「竜牙。私のことどう思ってるの？」

「え!？」

聞いちゃだめな気がした。  
でも聞いてしまった。

「…」

「竜牙…」

竜牙は黙り込む。

そして雪ちゃんのような笑顔を浮かべる。

「こんな鈍感な姫に言う必要がありますか？」

え？

「だから…秘密ってことです」

竜牙は口に人差し指をあてる。

「だから蓮に鈍感って言われるんですよ」

「え？聞いてたの？」

「もちろんです」

「竜牙は…本当に意地悪だよ」

私は笑う。

「それは…紀奈紅が勝手に思ってるだけです」

「冗談だよ」

竜牙は笑う。

「ねえ……」

「何ですか？」

「いつまでもこんな風に続けばいいのにな」

「……そうですね」

「100年先も……ううん……50年……1000年先も……！」

「1000年先はオレ達生きてないかもしれないかもしれませんよ」

「たしかに……！」

私は竜牙にそう願いを言った

いや

願わなくても

みんなと

一緒に

いるのは

当たり前だと

思ってた

でも

でも

もうすぐ

その願いが

潰されることに

なるうとは

誰も

予測できなかつた

その

願いが

潰されるのは

4年後

私が

病院に受診に

きたとき

だ  
っ  
た

夜  
空  
の  
星  
達  
が  
騒  
ぎ  
出  
し  
た



第13話 竜牙へのキモチ（後書き）

近くの回で終わりそうですがまだまだ続きます。  
心配しないで下さい。（誰が心配するんだよっ）

## 第14話 高校生（前書き）

いきなりですが、紀奈紅達高校生になりました！！  
これから高校生編です。

中学校、省くのを許してください。

## 第14話 高校生

私達は高校生になった。

竜牙も雪ちゃんも亜宮敵も紗紀も杏実も同じ高校。

舜斗も

そしてまだ告白できてない。

いつかは告白できると思ってるけど…。

「紀奈紅うううう　どっこ行くの??？」

私は俯き加減に返事をする。

「病院　今日検査なんだあ。緊張する〜」

緊張してるのは本当。

だって今日は寿命宣告の日。

友達は20才って言ってたから私も20才ぐらいかな???

「んじゃあ、バイバイ」

紗紀がニコツと笑って言う。

そして彼氏の南のほうへ素っ飛んでいく。  
幸せそうだな…。

紗紀は拒食症も治って大人の女性に早変わりした。  
小学校からは想像できないなあ。

私も話し方変わったけど

「…バイバイ…紀奈紅…」

亜宮敵も変わったよね。

喋り方は変わってないけど。

ポニーテールにして可愛くなった。

彼氏は作らないつもりらしいけど…亜宮敵ならダイジョウブだよ。

「バイバイ。亜宮敵」

ガシッ

!?

目隠しをされる。

「だ〜れだ?？」

この声は…。

「雪ちゃん!」

「あっ तरीい」

雪ちゃんも変わってないんだから。  
可愛くてモテてるってゆーのは特に変わってないね

「さようなら。紀奈紅」

「バイバイ。まった明日あ」

竜牙は変わったかな…??

だって眼鏡をコンタクトにしたもんね。

「バイバイ紀奈紅」

ドキ…。

「バ…バイバイ！舜斗」

貴方は昔から変わってないよ…

一途なところも

かっこいいところも

私は1-Eから超特急で出る。

「鹿王院さん!!」

「バイバイッ!!」

私のファンクラブもまだある…。

何でかな…??

私は靴箱をあける。

バサッ

「？」

靴箱から大量の手紙がでてきた。

「何コレ??」

私はそれをカバンにおしこむ。  
後でじっくり読もう。

「お疲れ様です。お嬢様」

「じいや!!」

私はじいやにカバンを渡すと、車に乗り込んだ。

「重いですね…今日もですか…?」

「分かんない!アレだったら即断るけど」

私の靴箱にはよくラブレターが入ってる。

「だって私は舜斗がスキなんだもんっ!!」

「そうですか」

私は笑う。  
じいやは笑い返す。

ブーン

1時間後

「つついたあああ」

ここは【京蘭総合病院】。  
私に通っている高校と一緒に名前だ。

「走ってはいけませんよ。お嬢様」

「分かってる」

私の喘息は高校に入ったときから 酷くなってきた。  
走ったらダメになったから。  
本当は舜斗と同じ陸上部に入りたかったんだけど。  
仕方がないか…。

「それにしても可愛いですね。この携帯ストラップ」  
じいやは月の携帯ストラップを見る。

竜牙に『紀奈紅によく似合ってます』って言われたときからつけてるんだ

本当は…幼稚園のときに雪ちゃんからもらったものなんだけど…。

気に入ってるよ。

「…じいや…」

「なんでございましょうか？」

私の額から汗が流れる。

「今日は…寿命…」

「ダイジョウブですよ」

じいやは笑いかける。

「…そうだよねっ…うん…ダイジョウブだよっ」

「よかったです」

じいや…。

『ダイジョウブ』って言うてくれて嬉しかったよ。

ダイジョウブだよね…。

私は…舜斗にキモチを伝えるまで死なないもん！

「さ〜〜〜！！頑張っていくぞっ」

「モチロンです」

じいやはまた、笑いかけた。

ダイジョウブな気がしてきたよ



第14話 高校生（後書き）

物語が急ピッチで進んでいったのをお許し下さいm（  
m

## 第15話 宣告

「こんにちわぁ…」

私は少し遠慮しながら声を出す。

「来てくれたの??」

そこにいたのは黒髪の美しい女性。  
うっとりするほど綺麗。  
そして私の目標のヒト。

「はい！美虎<sup>みこ</sup>さん!!」

美虎さんはホツとしたような顔をみせる。

「ほら…前に…来てくれなかったでしょ??」

「あ…あれは時間がなかったんです!!」

後ろでじいやがため息をついているのが分かる。

だって本当は舜斗達と文化祭の準備してたんだもん。

「…っで…舜斗はこの頃どんなかんぢ??」

美虎さんは舜斗の母親。

『あいつ超ウザイ!!』って舜斗がいつも言ってるけど私は美虎さんのことが大好きなのを知っている。

「そんなにあつりませ〜んよお！怪我もしてませんしい」

「ふ〜ん。ならいいのよ」

美虎さんは私の様子を見る。

「お嬢様。わたくしは外でまっていますね」

じいやは待合室にもどって行った。

美虎さんがニヤリと笑う。

「あたしが…聞きたいのはそっちじゃなくてえ」

私もニヤリと笑う。

「私と舜斗の恋…ですかあ??」

「そうよっ！…！！！！！！！！」

美虎さんは私が舜斗のことをスキなのを知っている。

中2のときに口が滑ってしまったのだ。

でも今は言つてよかったと思つてる。

いい相談相手になつたからね！

「小学校の頃から変わつてませんよお。ぜんぜん進展なし」

「うそお。あたしが紀奈紅ちゃんぐらいのときはもう舜也しんやとラブラブだつたわよお」

美虎さんが勝ち誇ったように笑う。

「でも…私だって…」

言い返せない…。

おもわず半泣きになる。

「私って…ダメなのかなあ…」

「ダイジョウブよ!! ゆっくりなれときなさい」

私は涙をふく。

「ですよねえ!!」

「そうよっ!!」

その時私の頭にある考えがよぎる。

“ワタシハイツマデイキラレル??”

私はその考えを消すように首をふる。

しばらく…沈黙が続く。

「…検査…するよ…??」

沈黙を破った美虎さんの声。

「……………は……………」

“はい”

この言葉が出てこなかった。

寿命を聞くのが怖かった。

私の手に汗がにじむ

“ワタシハイツマデイキラレル??”

“コワイ……”

“シニタクナイ……”

目の前がぐらっとした。

『ダイジョウブ』…。

「はい」

焦点が合わない目を美虎さんに向けた。

「分かったわ」

“カクゴハシナキヤ……”

1時間後

美虎さんが座っている椅子がギーと鳴る。  
緊張が頂点に達した。

心臓の鼓動が早くなる。

ドクン…ドクン

私は美虎さんの顔をみなかった。  
怖くて…見れなかった…。

「…紀奈紅ちゃんの寿命は…」

私は拳を握り締める。

“コワイ!”

“コワイ!”

「あと…約1年…で…死ぬ…可能性が99%…です…」

その瞬間目の前が真っ暗になった。

“ワタシアト1ネンデシヌノ???”

“コワイヨ……”

“シニタクナイヨオ……”

“モット……”

“モット……”

“ シュン卜卜イッショニイタイヨオ… ”

## 第16話 絶望（前書き）

「夜空達の過去」を消しました…。すいません…。いつかは復活させるつもりです。

## 第16話 絶望

私はしばらく固まっていた。

“アリエナイ”

その考えだけが頭をよぎった。

私が…死ぬの??

後…1年で…。

なぜ死ななければならない?

私にとってはありえないことだらけだった。  
本当に。

「美虎さん…」

どれぐらいたっただろうか。

やっと私は口を開いた。

美虎さんは安心顔を一瞬した。

「私…後1年ですか…??」

美虎さんが申し訳ないように言う。

「そう…」

頭の中であの考えがまた現れる。

“アリエナイ”

涙を出したい。

「あれっ…?」

涙が出てこない。

まるで…泉が乾ききったような…そんな感覚。

今…竜牙の気持ちがあったような気がした。

自分が絶望に立たされたときの気持ち。

ヤダ…。

私は拳を開く。

汗びっしょりの…手。

「紀奈紅ちゃん…」

美虎さんが静かに言う。

私は笑顔で答える。

「ありがとうございます。さようなら」

お辞儀をして部屋を出て行く。

「待ちなさい!」

今の私には聞こえない。

いつそのことどこかに消えてしまいたかった。

暗闇に

外は暗くなっていた。  
私はうつらな目を空に向ける。

“ホシガナイ”

“クライ”

“ツキモナイ”

頭がおかしくなりそうだった。  
でもそれを止めたのは

「きなちゃん!!」

この声…。

「雪ちゃん…?」

私はうつらな目のままその人のほうをむく。

その時の雪ちゃんの顔は今までに見た事がないぐらい悲しそうな顔  
をしていた。

「どうしたの…?きなちゃん」

雪ちゃんの可愛らしい顔が歪む。

私は雪ちゃんに抱きついて泣き叫びたかった。  
でもそれはできない。

誰にも話せない。  
誰にも打ち明けられない。

私だけの秘密。

「何にもない」

私はまたユラツと動き出す。

真つ青な顔をした雪ちゃんが止めにくたけど今の私には通用しない。

雪ちゃんは…悲しそうなでも…悔しそうな顔をしていた。

夜の街にきた。

キャバクラや見るのもいやになる店がいっぱいある。  
でもそれは昔の私。

今はここで遊んで全てを忘れたかった。

「おっ！！可愛い子発見！！」

男が近づいてきた。

私はとびきりの笑顔をみせた。

「私と…遊んでよ」

男が言う前に私は言った。

男の顔が笑いで歪む。

「その代わり大人数で」

男は不服そうな顔をした。

「…いいぞ…」

そして全員彼女持ちの子を連れてきた。  
たぶん私と二人っきりで遊びたいらしい。

「行こう」

男の手を握る。

タバコ臭い匂いがする。

「オレの名前は雨宮あめみや 瑚紹都こしやと。お前は？？」

「鹿王院 紀奈紅」

男の目がカツと開く。

「オレのことこれから瑚紹都ってよんでくれよな。紀奈紅」

男のズボンに目を落とす。  
汚い…。

「その制服は京蘭校だろ？」

瑚紹都が私の制服を指して言う。

「そう…京蘭…」

瑚紹都はハンサムな顔をしている。  
うっとりするぐらいだ。

「今日は二人だけで遊ば…」

私は甘えた声を出す。

もう…ヒトと会いたくなくなっていた。

「ああ」

瑚紹都が私の腕を引っ張る。

ああ何でこんな奴を信じられるんだろう。  
私の頭がおかしくなってるせい…？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2182d/>

---

お嬢様と夜空

2010年10月10日04時28分発行